

氏 名 呂 怡屏

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 2257 号

学位授与の日付 2021年9月 28日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 台湾の先住民族認定とエスニシティの形成に関する文化人類
学的研究——シラヤ族の「正名運動」を事例として

論文審査委員 主 査 信田 敏宏
地域文化学専攻 教授
野林 厚志
地域文化学専攻 教授
吉田 憲司
比較文化学専攻 教授
韓 敏
比較文化学専攻 教授
清水 純
日本大学 経済学部 教授

(様式3)

博士論文の要旨

氏 名 呂 怡屏

論文題目 台湾の先住民族認定とエスニシティの形成に関する文化人類学的研究
——シラヤ族の「正名運動」を事例として

本論文の目的は、台湾の先住民族であるシラヤ族が、台湾の中央政府に対して先住権を求めてきた「正名運動」の分析を通して、シラヤ族のエスニシティが形成される過程を明らかにすることである。「正名運動」とは、台湾原住民族の人びとが先住民族としての公的な承認と先住権の獲得のために行ってきた社会運動である。1980年代以降、民主化を背景にして様々な民族アイデンティティが台湾社会の中で顕在化してきた。一方で、シラヤ族を含めた平埔族は漢化が進み、先住民族集団としての公的認定を受けられない現実がある。

従来、平埔族の「正名運動」を対象とした研究では、法制度を改正する要求と伝統文化を復興する営みが扱われてきた。これらの研究では、法制度の批判的検討と文化復興の事例紹介にとどまり、「正名運動」が必ずしも体系的には扱われてこなかった。

本論文は平埔族のなかで「正名運動」を積極的に進めているシラヤ族を対象とし、先住民族の身分を回復するための様々な交渉の過程、民族認定の条件を満たすために行われた文化復興の実践を民族誌として記述し、集団内、民族集団間、政府との関係のなかで、シラヤ族のエスニシティが形成されていく過程を分析した。その上で、シラヤ族が台湾社会の中に自らを改めて位置づけていく営みを歴史的、社会的、文化的文脈から明らかにした。

本論文の構成は次の通りである。

第1章では研究の目的と先行研究を紹介し、エスニシティ研究と台湾社会の研究における本論文の意義を示した。

第2章では、歴史学と人類学の研究における平埔族の捉え方を整理、分析し、平埔族のエスニシティの時代的な変化を考察した。

第3章では、1980年代以降の「正名運動」における、シラヤ族と地方政府及び、中央政府との関わり方を比較した。地方政府が1990年代末から地域の歴史を尊重し、シラヤ族の「正名運動」に協力的であったのに対し、中央政府は2010年以降に多文化主義の考え方をもとにして「正名運動」に対応していった時間的なずれを考察した。

第4章では、シラヤ族が継承してきた「阿立祖信仰」について、本論文の調査地である吉貝要集落の住民の日常生活における礼拝、信仰に関する口頭伝承について具体的な事例を記述した。「阿立祖信仰」には漢族の民間信仰の要素が組み込まれている一方で、それら民間信仰では説明できないもの、例えば、祭祀の対象となる壺や花瓶をはじめとする物質文化、宗教的職能者のシャーマニスティックな特徴、諸儀礼の手順や供物に見られる、「阿立祖信仰」のもつ独自性を明らかにした。

第5章では、吉貝要集落で行われているシラヤ族の年中行事である「夜祭」についての民族誌的調査の結果を示し、国の無形民俗文化財の指定が「夜祭」に与える影響、「夜祭」

に関わる様々な立場の人たちの考え方とその変化を考察した。「夜祭」とその準備の過程はシラヤ族文化に関わる機会を集落の住民に増やすことになり、住民の伝統文化への再認識または帰属意識を強めるとともに、外部者にシラヤ族の先住民族としてのエスニシティを意識させていたことを指摘した。

第6章では、17世紀に編纂されたシラヤ語による聖書、17世紀から19世紀にかけて作成されたシラヤ語と漢語が併記された土地売買契約書、1920年代の言語学調査の資料に基づいてシラヤ語の文法や語彙が再建されていった過程を記述した。また、再建したシラヤ語を用いた教材の開発や小学校でのシラヤ語教育の様子を分析的に記述した。

第7章では、吉貝要集落とシラヤ族の支族とされてきたタイヴォアン族の小林集落での伝統文化の再興に焦点を当てた。両方の集落で共通していたのは、博物館に収蔵されてきた衣服の資料、古写真も含めた歴史資料が研究者との協働のなかで活用され、刺繍工芸を中心とする伝統工芸の復興が進められた点であった。さらに、2009年に発生した「八八水害」で被災した小林集落の住民は、先述した物質文化の再生と自分たちの文化を展示する博物館の建設を通して、シラヤ族としてではなく、タイヴォアン族としてのエスニシティ形成を進めていることを明らかにした。

第8章では、日本の町づくりに当たる「社区総体营造」に焦点を当て、吉貝要集落の人々が自らの歴史と文化を解釈して景観を創造する過程を記述した。これらの景観は集落の住民や外部からの訪問者に、シラヤ族のエスニシティを可視化させ、その歴史と文化を理解させる役割を果たしていることを明らかにした。

以上の各章で明らかにしたことにもとづき、考察では現代のシラヤ族のエスニシティの形成について、以下の3つの結論を得た。

1) 歴史的に異なる統治者の政策により、集団間関係に変化が生じ、現在の台湾原住民と平埔族といった民族集団が差異化された。清朝統治時代には、統治者と近い距離にある非漢族の台湾住民が熟番と分類された。日本統治時代には近代国家を構築するため、熟番と生番の自律的社会は解体させられ、のちに平埔族と高砂族に改称され、地方行政に組み込まれていった。1950年代以降、中華民国政府は国民国家の形成にあたり、かつての高砂族は同化政策の対象となる民族集団として標識したが、平埔族はすでに漢族の歴史と社会に組み込まれた存在とした。このように、平埔族のエスニシティには時代による変化が見られ、それは施政者によって強い影響を受けていたことが明らかになった。

2) 施政者や多数派の漢族側が一方的に与えてきた先住民族のエスニシティは、1980年代以降、中華民国政府が多民族で構成する台湾社会のあり方を承認することで変化していった。この時期に展開した原住民族運動に影響を受け、シラヤ族が開始した「正名運動」は、その初期には地方政府と連携すると同時に、中央政府と対峙するという特徴が見られた。シラヤ族は地方政府と中央政府との政治的交渉を進め、既存の先住民族の認定制度を根本から変えるのではなく、新たな民族カテゴリーを設けることで、台湾社会の中における自分たちの位置づけを確固たるものとしていった。

3) 先住民族の身分認定を要求する運動と並行して、シラヤ族の人たちは他の民族集団、政府、研究者等と関わりをもちながら、民族認定の基準を満たすための文化復興に取り組んでいった。特に、伝統的な信仰として継承されてきた「阿立祖信仰」を核とし、その年中行事をより活性化させたり、博物館に収蔵されてきた祖先の資料を手がかりとした文化

復興を通して、シラヤ族の人たちは、自民族への帰属意識を強めるとともに、自らの歴史を掘り下げ解釈する態度を涵養していった。

以上のことから、シラヤ族のエスニシティの構築のメカニズムは、国家の制度から大きく逸脱することを避けながら、独自の文化と民族固有の歴史の確立を目指したものであり、そこには台湾社会への協調と自分たちの主張の両方が存在していた。換言すれば、現代の台湾において構築されているエスニシティは、歴史的な多層性を背景にしながらも、民族集団、中央政府と地方政府、一般台湾社会、民族集団を研究する研究者との関係のなかで、集団間の境界線が引き直され続ける多相的なものと捉えることができる。

博士論文審査結果

Name in Full

氏名

呂怡屏

Title

論文題目

台湾の先住民族認定とエスニシティの形成に関する文化人類学的研究
——シラヤ族の「正名運動」を事例として

本論文は、台湾に暮らすシラヤ族の先住民運動に関する民族誌的記述を通して、先住民族としてのエスニシティの形成過程を解明することを目的としている。

台湾では先住民運動を「正名運動」と呼んでおり、「正名運動」とは「原住民」（台湾では先住民を「原住民」と表記する）が「原住民族」として公的認定を受けるための政治的な活動や、「原住民族」としての社会的な認知を求める文化復興運動を指している。シラヤ族は、平埔族に含まれる民族である。「原住民族」として認定されている山間部に暮らす先住民族と異なり、平地に暮らし、歴史的に漢族との交流があり、漢化が進んでいる平埔族は「原住民族」として公的に認定されていない。

シラヤ族の集落は台湾の複数の県に散在し、広範囲に分布している一方で、いずれも漢化の度合いが高く、シラヤ族としての広域的連携も乏しく、宗教儀礼のみが民族的固有性を感じさせる形で残存してきた。台湾で先住民運動が盛んになった時点では、独自の言語・文化・社会はほとんど消滅し、シラヤ族としての統合性はすでになく、個々の集落が漢族社会に取り囲まれた中で孤立していた。このように台湾の先住民族の中で独特な立ち位置にあるシラヤ族であるが、近年では先住民運動を実践する人々が出てくるなど、民族意識やアイデンティティに大きな変化が生じている。出願者は、こうした近年の動きに着目し、運動の中心地である台南市の集落においてフィールドワークを実施し、シラヤ族の先住民族としてのアイデンティティが立ち現われ、エスニシティが形成されていく過程をいわば現在進行形の形で追跡し検証したのである。

本論文は、10章から構成されている。

第1章の序論では、台湾における民族状況を説明し、平埔族とその下位民族としてのシラヤ族の居住地域や彼らを取り巻く政治的・社会的な状況を概観している。また、台湾の民主化という歴史的な政治状況に目配りしつつ、台湾における先住民運動の歴史を振り返り、先住民族認定の実情にも触れながら、平埔族やシラヤ族にとっての先住民運動の課題に言及している。さらに、文化人類学におけるエスニシティ研究や、平埔族やシラヤ族のエスニシティ研究を概括している。

第2章では、主として日本統治時代以降の先行研究を手がかりに、平埔族の歴史を跡づけている。オランダ、清朝、日本による統治を経験した台湾では、それぞれの時代において、平埔族に関する記述が残されている。本章では、記録文書や学術調査の成果を手がかりに、平埔族をめぐる名称の変遷や記録文書に見られる生活の変化を丹念にたどっている。

第3章では、シラヤ族を含む平埔族の正名運動を取り上げる。先住民運動を展開する平埔族のリーダーたちは、地方政府と協力しながら、中央政府と交渉していくが、エスニシ

ティや法的身分の問題などが絡み、運動は紆余曲折する。しかし、2016年の政権交代により、平埔族の先住民族認定に関する法律改正が検討されることになり、平埔族の先住民運動は大きく前進した。本章では、民族の法的な身分に関する政治的な動きを記述し、先住民運動の担い手たちのそれぞれの思惑について分析を試みている。

第4章では、フィールドワークを実施した集落におけるシラヤ族の阿立祖信仰（「アリボ」と総称される神々を祀る信仰）を取り上げる。本章では、シラヤ族の阿立祖信仰を漢族の民間信仰である道教と対照させながら、信仰の実践における漢化の影響やシラヤ族としての独自性を明らかにしている。本章の後半では、阿立祖信仰に基づいた年中行事や人生儀礼が詳細に記述されるが、こうした記述を通して、漢族の道教との共存が見られる阿立祖信仰は、シラヤ族にとってのアイデンティティの象徴であり、正名運動の中でも重要な位置を占めていることが説得的に示されている。

第5章では、シラヤ族の阿立祖信仰の年中行事の一つであり、民族アイデンティティの拠り所となっている夜祭を取り上げる。夜祭は、アリボに対して収穫の感謝を表す豚の供犠と、アリボを慰撫する舞踊から構成される。現在では、多くの観光客も訪れ、国が指定する重要文化財となっている。本章では、夜祭の儀礼過程が詳述され、先住民運動の文脈や文化継承の観点から、シラヤ族がエスニシティを形成していく上での夜祭の役割が明らかにされている。

第6章では、シラヤ語の復興過程とコミュニティへの普及活動が述べられる。本章では、日常で使用されることもなくなり、半ば失われた言語となっていたシラヤ語を、シラヤ族出身者と言語学者が協働で、オランダ統治時代の聖書や福音書、清朝時代の土地売買契約書、日本統治時代の言語学者による記録を手がかりに、周辺の他のオーストロネシア語族の言語と比較しながら復元したプロセスが詳らかに記述されている。

第7章では、先住民族の文化復興に対して博物館が果たす役割に着目しながら、シラヤ族とシラヤ族の支族であるタイヴォアン族の事例を取り上げ、物質文化の再生のプロセスやエスニシティの形成について論じている。前半では、博物館に収蔵された平埔族の生業道具、儀礼用具、衣装などの資料の整理・研究の過程や、博物館での展示の様子が記述される。また、台湾や日本の大学や博物館との連携・協働の中で、収蔵資料が文化復興の基盤として活用されていくプロセスも記述されている。後半では、シラヤ族の刺繍工芸の取り組みや、大地震で被災したタイヴォアン族の集落における文化復興事業や刺繍工芸の製作活動を紹介し、そうした活動が集団のアイデンティティ形成につながった経緯を検討している。

第8章では、調査地であるシラヤ族の集落の景観が、文化復興と連動しながら改変されていく過程を、エスニシティ形成の観点から記述・分析している。1990年代半ば以降、台湾では「町づくり政策」として、地方社会の活性化が進められている。調査地の集落もまたそうした政策の一環として、2000年代以降、景観の改変が進められたが、それは文化復興の動きと連動するものであった。本章の結論では、そうした集落の景観再編事業は、シラヤ族としてのアイデンティティを醸成し、エスニシティを形成する装置として機能していることを指摘している。

第9章では、本論文での議論を振り返りながら、シラヤ族の先住民運動におけるエスニシティの形成について、統治する側との交渉、台湾社会への発信、他の先住民族との交流、

シラヤ族内部の関係性といった観点から考察している。

結論となる第 10 章では、シラヤ族のエスニシティ形成には、1) 歴史的に異なる統治者の政策による民族集団の差異化と民族間関係の変化、2) 多民族社会における先住民族認定制度、3) 文化復興による民族アイデンティティの活性化、が多層的に関わっていることを示している。

本論文は、現代を生きる漢化した先住民シラヤ族のエスニシティの形成過程を多角的な視点で描き出し、民族としての再生過程の動態について巧みな分析を行なっている。出願者がシラヤ族という一つの民族集団のアイデンティティ形成のプロセスをリアルタイムに把握できたことは、幸運ともいえるが、そのような集団を研究対象に選んだこと自体、エスニシティ研究の視点から言えば慧眼といえ、その歴史的・学術的意義は高い。また、本論文の内容も、民族集団のたどった歴史、「正名運動」、信仰、言語、工芸、景観など、異なる位相における動きを、コミュニティの構成員、先住民運動のリーダー、地方政府と中央政府、一般台湾社会、研究者といった多様なアクターの間での相互交渉のプロセスとして描き出すものとなっており、現代の台湾において構築されているエスニシティの多層的かつ動的な性格を描き出すことに成功している。論の組み立ても堅固であり、「シラヤ族の民族誌」としての完成度は高く、従来のシラヤ族研究に対しても優越性が認められる。

あえて難点を挙げれば、論述の焦点をエスニシティの「構築」においたため、それに伴う集団内外における軋轢や葛藤など、運動の負の側面についての記述と考察にやや欠けるきらいがあること、また、結論において、本論文がエスニシティ研究、あるいは台湾先住民研究に対して新たな貢献をしているにもかかわらず、それを明確かつ十分に提示していないことが惜しまれる。さらに言うならば、シラヤ族および平埔族以外の平地・山間部に暮らす先住民族の状況についての記述が少ないことも難点として挙げられる。台湾の他の先住民族との差異、とりわけ漢化の問題についてより踏み込んだ議論を行なうことにより、シラヤ族や平埔族のエスニシティの特徴をより明確にできたと考えられるので、その点は出願者にとって今後の課題となるであろう。

とはいえ、これらの点に関する知識と情報は、当事者に対する丹念なインタビューや集落の人々と生活を共にするフィールドワーク経験の中で、出願者自身がすでに手にしているはずのものであり、本論文の達成をいささかも損なうものではない。以上の理由により、審査委員会は全員一致で、本論文が博士の学位授与に値すると判断した。